

前触れ

悪夢と恐怖とを往復するうち
ひとつの呻きが陽光をたくり寄せ
灰色に光る雲が目を開く

ふくれ上がる懐かしさをさらに覆い隠そうとする者
その巨大な反動こそが真の静寂の源泉
真の解放の源泉だ

翔び立つ者よ
溶け去るがいい、大気へと
この僕の冷え切った胸の中へと

靴を濡らす朝霧の含み笑いをかき分け
何を歩もうとしているのかもわからず
ただ、かすかな美と大いなる恐怖とに誘われるまま

ああ、この両掌の上に載っている者をこそ
この者をこそ、常に僕は愛していた
全ての哀しみと苦しみをあげて、愛していた

背中に突き刺さる羽毛の痛みと
この逃亡の中に次々と生まれる憧れの痛みと
どちらも振り切ることはできない

ひれ伏すがいい、おお、生活という名の空なる者よ
ひれ伏すがいい、この両掌の前に

(1992.12.6)